

読  
ま  
れ  
た  
北  
條  
民  
雄

川  
津

誠

### **How have Hojo's works been read?**

---

The works of Hojo Tamio have largely been read as "I novel."  
Readers have found in his works the figure of the writer who puts up a determined struggle against leprosy and strives to preserve the dignity of human life.

However, this common perception of Hojo Tamio does not take into account the prejudice and discrimination against victims of leprosy that were prevalent in contemporary society.

It would be unfair to praise the figure of Hojo Tamio unconditionally.

Readers must recognize the firmly anti-social nature his work.

今年（平成27年）2月21日の朝日新聞朝刊の一面に、「弱気な漱石」という見出しの囲み記事が掲載された。『虞美人草』の連載直前、執筆中の心境がうかがえる、全集未収録の書簡が発見されたというものであった。漱石の朝日新聞入社に関わった渋川玄耳宛てのものだ。6月16日消印ということであり、6月23日に始まった『虞美人草』連載の7日前になる。「なんだか前途遼遠」「虞美人草が出来ねば或は月給をもらひに出ぬかも知れぬ」といった文を紹介し、「まるで自信がない」と評する。「後の文豪も、新聞連載1作目は不安との闘いだったようだ」というのが、記事のトーンだ。

全国紙の一面に来る記事内容かと言えば首をかしげざるを得ないが、先般の『こころ』発表100年を記念して再掲載を行い、その後も漱石作品を順次取り上げていくらしい（3月の時点では『三四郎』が掲載中だ）朝日新聞の広告の意味合いもあると思えば（続いた失策のイメージ回復の一助としたいのかも…と意地悪く勘ぐりたくなりもするが）解らなくもない。興味深い内容でもある。

しかし、その「興味深さ」は、一般に誰もが共有しているものだろうか。新聞の一面に載せる程に。初めての新聞連載を目前にして、もはやそれなりに書き進めてきてもいるはずの漱石が自らの責任の重さを感じ不安に駆られている姿に、作家としての誠実さを見ることはできよう。自信満々でいようはずもない、漱石として普通の人間だ、といった感想もありうる。とはいえ、それを知ったことで『虞美人草』という作品の読み方が変わるわけではないのである。

この記事が興味深く伝わるためには、東京帝国大学教師を辞めて職業作家になることの持つてゐる当時の意味、漱石の『吾輩は猫である』発表以来の評判、といった情報がなければならぬだろう。そういう文学史的な知識に加えて、「弱気」でない漱石というイメージがあらかじめあることが必要になる。謹厳で少しいかめしい、初対面であればこわごわでも話しかけにくそうな、偉い先生、といったイメージ。そういう漱石像が読者に共有されているという見込みがなければ、「弱気」と書くことで、読者が意外性を見出すだろうというこの記事は成立しない。しかしたえば漱石の作品の中で読者の多い『吾輩は猫である』や『坊ちゃん』を通して作家のイメージが作られるとしたら、漱石のイメージはどのように気むずかしい姿ではあり得ないだろう。高校生の頃に大概教材か課題図書で出会ったはずの『こころ』の作家なら多少きまじめで気難しく想像されうるかも知れない。が、その程度だろう。千円札の肖像画の顔も、そこまで強気な人物を思い浮かべさせるとも思えない。

言つてしまえば、夫人始め親族や弟子筋にあたる人々が伝えた人間漱石、夏目金之助についての情報が、加えてあまたの研究者が調べ明らかにした漱石の姿が、そのような「気難しい漱石」像を定着させてきたのだだろう。作家夏目漱石、或いは夫、父親、教師としての夏目金之助に関する様々な言説、研究の積み重ねが、「気難しい漱石」を人々に共有させた。少なくとも日本近代文学に詳しい記者にはそう思い込ませることになった。

むろん、この記事の背景を詮索することが目的ではない。作品を読みその中から作家の姿がイメージされていくのではなく、たとえば少なくとも多くの中高生は興味のあるなしに関わらず国語の授業の中で教材の書き手についての情報を知らされることになる、そのように作品外の情報によって作家のイメージが作られ流通し共有されていくのだろう、という事が気になったのである。

繰り返すが、『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』を書いた漱石であれば、そのイメージはそれほどに「気難しい」

という事にはならなかったろう。その後の『明暗』に至る作品の積み重ねによって、夏目漱石は初期の軽やかでもあり得たイメージを自ら書き換えていったのでもある。そのことはまた、後の研究者達の漱石像の方向を決めもしたのだろう。それでも、漱石の作品全体を通してみる時、単純に「気難しい」というイメージが前面に来るはずの作家ではない、と思うのである。

確かに、残された作品の全体を読みその上に作品や作家をめぐる言説を重ねていつてイメージを形作る、といった形で受容される作家は殆どいないだろう。作品の印象が強ければ強い程、そのイメージに後の作品の理解は影響されかねない。また、ある批評の言葉がその後の理解を支配してしまうという事もありうる。むしろ、そのようにして作家のイメージは作られてきたのだ、といった方が正しいかも知れない。

ではたとえば、業病と呼ばれ忌み嫌われた癩病に犯され、一般社会から隔離された病院にあって作品を作り出していった北條民雄の場合はどうだったろうか。

## 2

北條民雄が「秩父號一」の名前で『間木老人』を発表したのは、「文學界」昭和10年11月号である。編集後記は「作者は某癩療養所の患者。内容の素晴らしさは読んでいただくとして、兎に角得難き記録である。」と記している。しかし、『間木老人』は北條の入院の記録ではなく、視点人物の宇津の目に映る癩病患者間木の物語である。癩を病んだ一人の老人の生と死を描いており、北條と重ねられうる若い患者宇津はしかし、間木によって自らの癩との向き合い方を見出すに至るのではなく、「大きな危機の前に立つてゐることを自覚」するだけである。既に療

養所にいる間木と入院間もない宇津との間に、間木と宇津の父が戦友であったという関係が準備されており、院内の二人の繋がりには病気になる前の院外の世界との繋がりにつらされていくことになるのだが、それは、「記録」というよりもやはり作爲的な物語という面を強める。であれば、編集後記がつけた「記録」というレッテルは、作者の意識ではむしろなく、読む側の視線、とらえ方という事になる。間木老人の物語よりも、細部の、病人や院内の描写にとらわれてしまったのだ、といえ過ぎであろうか。

『いのちの初夜』が発表されたのはその三ヶ月後、「文學界」11年2月号であった。北條の文学界への窓口となった川端康成が明らかにしているように、川端によってつけられた『間木老人』発表時の筆名「秩父號一」を北條自身がつけた「北條民雄」に変えている。北條とおぼしい入院したばかりの「尾田」という主人公か、古い入院患者の佐柄木によって、癪という病に直面させられてゆく。そして、肉体が朽ちかけてなお生きている患者の姿を目にして、命そのもののあり方を見、自らの生のあり方、その可能性に目覚めようとする―あくまで、まだ、目覚めようとする段階、なのだが―に至るといふ物語である。これもまた前作同様作爲的な物語であったはずだが、北條が川端宛の書簡（昭和10年12月8日消印・「定本北條民雄全集下」・創元社）で述べているように「何よりも生きるか死ぬか、この問題が大切」という、北條自身の生の意識が前景化され、あたかも私小説のように受け止められることになったのだった。「記録」という、『間木老人』につけられた編集後記のレッテルはこの作品にも当てはめられることになるだろう。むしろ、この作品こそが、北條に向けられた期待の視線を満足させるものだったと言つてよい。無自覚であつたろうが、読者の中に『間木老人』によって喚起された癪病院への意識が、作品そのものよりもその中に生きている人間の生のあり方への興味であつたかもしれないことを『いのちの初夜』が明らかにしたのだった。作家の名前は北條民雄であり主人公は尾田であつても、尾田イコール北條、として読者には伝わる。しかし

ると、「秩父號一」から「北條民雄」への筆名の変化も、より本名へ近づくと捉えられたものではなかったろうか。『いのちの初夜』を発表した「文學界」2月号に、川端は「『いのちの初夜』推薦」という一文を寄せ、その中に先の書簡を引用している。

「この病院へ入院しました、最初の一日を取り扱ったのです。僕には、生涯忘れることの出来ない、恐しい記憶です。でも一度は入院当時の気持ちに戻つてみなければ、再び立ち上がる道が掴めなかつたのです。」

この後に先に引いた文も続いていくのだが、この北條の言葉を示すことによって、「いのちの初夜」は作家の事実を描いた、私小説に類するものだ、と受け止められることになったのだ、と言つてよいだろう。

「文藝春秋」11年3月号の豊島與志雄の「文芸時評」は『いのちの初夜』について、川端の引いた書簡に触れて「これで見ても、この作品は明かに、過去の1日に立ち戻つて書かれたものであり、云はば記録的に書かれたものである。」と述べている。「書かれている種々の事柄は、作者がそれを書いた時と同様だろうと思われるほど生々上つてゐる。それは、過去に一つ一つ残されていつた足跡ではない、一つ一つ落されていつた石ころではない。凡てが呼び覚まれ、眼を見開いて、一つの思念の中に喘いでゐる。」と続ける豊島は、『いのちの初夜』に「現在の吾々に繋がる」「強烈な思念―思考」を見ているのだが、その前提になるのは、北條民雄という作家の、事実、現実がそこに描かれてある、という認識であつた。

「改造」の昭和11年3月号の「文壇寸評」は『いのちの初夜』への言及を冒頭に置いている。「レプラにとりつかれながら、ああいふものを書き得たことに頭を下げる。―略―北條氏は、むしろ、薄気味悪いほどの余裕を見せてゐる。―略―『いのちの初夜』は、自分の病氣をはつきりと自認するところからはじまる。」という文も、やはり事実として受け止めていることを示している。

小林秀雄は、『いのちの初夜』の発表を受け昭和11年1月24日の読売新聞に「作家の顔」と題する文を寄せ、北條について語った。「一つ異様な小説」と「いのちの初夜」に掴みの言葉をつけた小林は、「作者は入院当時の自殺未遂や悪夢や驚愕や絶望を敍し、悪臭を發して腐敗してゐる幾多の肉塊に、いのち、そのものの形を感得するといふ、異様に單純な物語を語つてゐる」とのべ、「かういふ單純さを前にして、僕は言ふところを知らない」と、北條の示した体験、癪病院の描写をそのまま受け止める。事実を前にして、その事実の力に対して言うことはない、というのである。

フロオベルの「ジョルジュ・サンドへの書簡」から「人間とは何物でもない、作品が総てなのです。」という言葉を引き、ロオレンスの手紙の「運命が僕を『作家』ときめちまはなかつたら」という苦しみをすくい取り、正宗白鳥がトルストイの死について書いた文章に重ねて「あらゆる思想は実生活から生まれる。しかし、生まれて育つた思想が遂に実生活に訣別する時が来なかつたならば、凡そ思想といふものに何の力があるか」と続けられた文章を北條に引きつけていけば、北條が己の直面している癪という生の根源に関わる問題の中から、書くことの苦悩を超えていかなる思想を作り出せるか、を期待しているのだ、と読むことが出来よう。

「今日までやつてきた実生活を省み、これを再現しようといふ欲望を感じない。さういふ仕事が終わらぬと思つてゐるからではない、不可能だと思ふからだ」という結び近くに書かれた言葉も、北條の方向性を示唆するもの、と考えられもする。が、それはまだ、先の可能性だ。小林は、北條の提示した世界を單なる私小説として読むことを否定しているのではあつても、「或る人曰く、俺に癪病になれとでも言ふのかい」と書く時、その世界が圧倒的な力を持つ現実として読まれていることを示しているのでもある。それが、普通の受け止め方だ、ということなのである。



それはつまり、実際に北條が癩を病んで癩病院にいる、という事実が、一人北條の境遇として受け止められるだけではなく、癩病という病気に対する社会的な視線を無自覚に寄り添わせつつ読者に浸透していくのではないか、ということだ。川端は殆ど病気に対する偏見を持つていないように見える。小林も、豊島も、文壇寸評の書き手も、そのような様子は見せていない。言うまでもない。しかし、当時の社会の中で癩という病気は、癩病患者は、形容しがたい程の偏見と無理解の中に置かれている。北條に対する共感や同情やといった諸々の読者の感想は、そのような社会通念の上に作られているものである。

3

北條民雄は、『いのちの初夜』発表後、『猫料理』（随筆・「文藝春秋」4月号）『眼帯記』（随筆・「文藝春秋」9月号）『癩院受胎』（小説・「中央公論」10月号）『癩院記録』（随筆・「改造」10月号）『癩家族』（小説・「文藝春秋」12月号）『続癩院記録』（随筆・「改造」12月号）と、創元社の定本全集上巻の年譜によれば自殺を決意し2週間関西を放浪、郷里にも帰ったとある6月前後の落ち込みの時期を挟みながらも、作品を書き、発表していった。「文藝春秋」での人気が高かったであろうことは、「中央公論」、「文藝春秋」、「改造」という当時の中心であった総合雑誌にそれぞれ発表できていることからわかる。そして、12月にはこれらを併せて創元社から作品集『いのちの初夜』を刊行する。この一年、『いのちの初夜』によって与えたインパクトは文学界に強く残っていたと考えることが出来る。その一つの、そして最も重要な現れと思えるのが、『眼帯記』『癩院受胎』『癩院記録』の発表を受けて書かれた、中村光夫の「癩者の復活」（文芸時評・「文藝春秋」昭和11年11月号）である。「陰惨な記録に満ちてゐる」北條の

作品にしかし「なにか爽やかな」読後感を持ったという中村は、「久し振りで文学自体の―または文字自体の―力に接する稀な機会を得た」とまで書く。『眼帯記』の「これだけの肉体的苦痛、それを背負つて、しかも狂ひせず生きてゐるといふことは、それだけでも健康何物にも勝つて健康である証拠ではないか―」という文を受け、「かうした作家に向つて健康不健康などといふ曖昧な区別だては無益であらう。私は氏に同情もするまい。氏を病人とも思ふまい。」と言う。

そして中村は、子規や梶井と比較して、北條には「最初から病者に伍して他人の苦悩を自己を通して表現している」という新しさがあつた、それはつまり「他人の姿を借り」て自分の問題を「客観化」しているのであり、言うならば「氏の『生命の問題』は氏の肉体を越えている」のであつて、そこに魅力の根幹がある。北條が「現代に生きる人間の苦悩を確と把えて表現している」から、その「作品が我々を惹きつける力が潜むのだ」とする。加えて中村は、北條の苦悩は「単に自己の病苦に堪えることには存しない。それはまさしく精神を一個の物質と見ることを知理によつて強ひられながら『癪者の復活』を信ぜざるを得ぬ点」にあり、これを北條の「いのちの理論」だと結論づけるのである。つまり、自らの問題としてただ癪を病んだ苦悩を語るのではなく、他の癪者の様子を自身に引きつけ自身にも予見される姿として捉え、彼らの存在を自身に重ねて表現していること、そして病の進んだその姿の中に、物質的な肉体のみと化した様を見ながらそこになお北條は命そのものを見出したのだ、ということであつた。

中村の「いのちの理論」は、北條の文学世界を語る言葉として流通していくことになったが、その北條の理論を浮かび上がらせる背景にあるのは、言うまでもなくこの時代の、癪を病む患者達が閉じ込められた世界についての一般的な認識だつた。これもまた、悪いというのではない。中村はこの文章を、北條が癪者の中に発見した人間は「生

命そのものの生きる姿」であって、「この「人間」は氏の肉体的不幸を越え、澁瀬と「健康な世界」に生きるであらう」「この意味で私は「癩者の復活」を信ずる」と結ぶのだが、言葉尻を捉えるわけではなく言えば、復活させねばならないところに、彼らは閉じ込められている、ということなのであり、そのことはおそらく気づかれていないのである。中村のように丁寧な批評を受ける程に、文学界に影響を与えていった北條であったが、そういう執筆活動が影響したということでもあるまいが、翌12年6月ぐらいから悪化させた腸結核に肺結核を併発し、昭和12年12月5日、闘病の甲斐なく死去する。23歳であった。作家としての活動は2年であった。

死の年12年は、年譜によれば、前年暮れからの神経痛に苦しみ1月をほぼ自室で静養、1月末から2月半ばまで病室に入室（北條の入院した全生病院は、多くの癩病患者収容施設と同様、患者の日常の場は病室とは別になっており、病状の悪化や余病併発の場合に治療病棟に入院する仕組みであった）、9月に結核病棟に入室と、癩病患者としては大きな外見上の変化もなく、軽症に見えながら、内実は病勢が進んでいたのである。発表できたのも入院記録的な『重病室日誌』（「文学界」4月号）『続重病室日誌』（「文学界」12月号）と『望郷歌』（小説「文藝春秋」12月号）に留まる。

川端康成は北條の死の翌月、「文学界」昭和13年2月号の北條民雄追悼特集に「追悼記序」を寄せている。

「――略――」

父君が遺骨を受け取りに来た時、私の家にも寄つてくれて北條君の履歴など聞き、初めて知ることもあった。それも今は書けない。父君その他の遺族は、北條君が小説を書いてゐるらしいと薄々知つてゐただけで、なにをどこに書いてゐるやら、全然思ひ及ばぬ風だった。肉親と絶縁しての文学である。それもやむをえない。かういふ本が出てゐると、私は「いのちの初夜」を父君に見せたが、ただそれだけで、お読みにならぬ方がいいでせうと言わねば

ならなかった。父君にしても、その本を持つて歩くことさえ出来ぬ人である。遺骨を受け取りに来て貰ったのは、まだ癩者としてよい方であらう。

—略—

長い引用になったが、川端の北條の父親に対する、つまり癩病患者を身内に持った人間に対する気配りの行き届いた文章であることが解るだろう。つまり、このように気配りをして父や家族を守らねばならない状況に当時の癩病患者とその親族は置かれていたということだ。北條が訪ねてきた時に会ったことも川端はこの後書いている。死の後直ぐに全生病院に行ったことも、その後の対応も書いている。北條に対し、癩病院に対して川端に全くの躊躇いがなかったかどうかは解らぬが、少なくともそのような片鱗だに見て取することはできない。が、「肉親と絶縁しての文学」や「癩者としてよい方」と言った言葉に、癩病を取り巻く時代の状況を川端も十分に知っていることは解る。そしておそらく、積極的にそのことの非を訴えようとしてはいないということも。むしろ、非難ではない。そういう、癩という病が担わされた特殊性を読者が共有していることが、北條の作品に心を揺すぶられるためには必要だったのかも知れないのである。

## 4

北條の死の翌月には、「月刊ペン」昭和13年2月号が『癩院日誌』『年頭雑感』『癩文学といふこと』『頃日雑記』の4編を遺稿として掲載し、同時に北條と癩文学に関する特集を組んだ。

川端康成の「北條民雄と癩文学」は北條自身というよりその周辺に多く言葉を割いている。たとえば「村山に癩

院を建てるには、血を見る程の地元の反対があり、また初めの患者達には、浮浪の果てのやうな無頼の患者が多かつた」という文章や、「北條君などは輕症の時に、療養所へ來たのだから、癩者だと知つてゐたのは肉親だけで、世間の人は見ても分らない。癩者として忌み虐げられながら世間を歩くことはなかつた」等、癩に向けた世間の目が見いだせる。

それから、院内で北條はけしい患者ではなかつたろう、といった話から、自由な社会にあつても作家として生きていくには周囲と調和するのが難しい、まして北條は「肉体の病苦の上に、精神の致命的な打撃を背負つてゐる。それで尚文学に昂然と精進するには、周囲と妥協などしてはゐられぬ」とその独善を擁護している。この文は、結びと響き合う。「社会はいよいよ大きいもののために自己を棄てることを求めつつあつて、しかも翻つて思えば、文学に献身することの真実を知らず識らずのうちに、欺き奪い去らんとしつつある時北條君などを思つてみるのも無駄ではなからう。」と結ばれる部分は言うまでもなく、大陸の戦火が長期化していく時代状況への抵抗意識である。自分たちの自由が奪われようとする時、それに抗う存在の先達として北條を考へることが出来る。北條が病と闘い、癩病院の不自由の中で文学に向かつたあり方を思へ、というのである。最初に引いた文章の後に川端は現在の村山を「設備の模範的な一個の文化村」で「相当の秩序が保たれてゐる」と評しており、癩病患者の置かれた環境に対する根本的な問題意識は示していないが、北條民雄という存在が基本的に反社会的な、反時代的な存在であるということを知識しているのでは、とは思わせる。その意識こそが、北條を評価する根底に必要なものなのではなかつたか。

特集は、全生病院の医師である堀口英一の「癩医の見た北條君の文学」に続く。「異常な作家北條君の登場」と始まるこの文章は、癩病患者の身近にいて専門的知識を持った人間が彼らにどのような視線を向けていたかを教え

てくれる。「そこは醜惡と、陰慘と、ありとあらゆる人間の悲劇と絶望の極限迄追いつめられた癩の世界であるかも知れない。しかし彼らはみんな満足な生活欲をもつて平和な陽を受けてゐるのである。健康の世界へ脱走しようなどといふものは誰もゐない。それは全く驚くべき平和さである。」と書く時、おそらくこの医師は本当にそう思っているのだらう。彼の目に映らないところで患者にどのような葛藤があるかを、苦悩の中に彼らがいるかを想像することはない。それは、癩を忌み嫌い拒絶するのと何ら変わりはない。

北條の日記にも出てくる医師の日戸修一も文章を寄せている。「医学の絶望と癩の悲劇的運命」という題は、悲観的で無残な現状把握と未来予想でもあるのかと心配される程だが、むしろ淡淡とした現状認識を与えてくれる。癩の病原体が癩菌でありハンセン博士が発見したこと、伝染病であることを示し、癩の悲惨さを、「病状の経過が順次に奪いゆくものは容貌であり手足である」「癩患者には容貌はない。試みにその悪臭限りなく腐敗し脱落しつつ失われる慄然たる顔を見られよ、眼、耳、鼻、呼吸器といふやうな器官が音もなく何の苦もなく侵されてゆくのである。」と、外貌の変化によるものだということを示す。その表現は問題はあるが、日戸が示しているのは、もう一步進めれば、癩という病気について社会が持っている意識は、偏見に過ぎないのだ、という事実を主張することになる。そこまではつきり言えてはいないが、そう考える知識情報を読者に与えるものではあると言える。それは、三好浩太の「癩医学」も同様だ。「日本癩病学の業績を検討して、ここに叙述した」と述べるように、日本医学界が癩の診断診療にどのように尽くし努めてきたかを述べている。素人にわかりやすいものではなくはつきりした成果が出ているわけでもないので、知識として読者に十分役立つものを与えているとは言えないが、癩が遺伝ではなく伝染する病気だということは示されている。

これらの情報は、社会が癩病に向けている視線が理由あるものではなく偏見に過ぎないものであることを示すに

十分だと思われるし、それは既に一八七三年ハンセンが癩菌を発見したのであったことを考えれば、それから60年も経過した後では常識に類する知識情報であつて当然だろうと思えるのだが、残念ながらそうではない。正確な病理に関する知識は殊更に求められることはなかった、と言つてもよいかもしれない。社会の常識としての癩への偏見を作り出し維持しているのは、癩患者を社会から隔離し表面的に文明国の体裁を作り上げようとした国家の政策であり、法律であつた。それに反発しうる人間は殆どいなかったのである。

それは、北條民雄自身にも言えることだ。全生病院での北條の友人であつた光岡良二は、「北條民雄の思い出」を寄せているが、その中で北條の容貌を描きだしている。現在北條の肖像として知られている友人東条耿一の書いた絵に重ねて。

「バツサリ耳の上まで覆さつた髪、やゝ突起した頬骨と、ぎゅつとつぐんだ口辺、だが何よりも特徴はその眼だ。四年前始めて会つた時から北條の眼は僕の中に強く焼きついてゐる。小刀でも抉つた様に細かく小さなそしてどこか三角な眼、それは物笑ふと殆ど無くなつてしまひさうになり乍ら、その奥にキラと光る何かがある。初めての人ならまともに合せてゐられない眼だ。それは苦しんでゐる眼、絶えず相手の心理の裸形を感じその為に傷つき続けてゐる眼だ。又何かにしつかりとよりかゝり絶えざる憂鬱から逃れようとする無限の飢渴の覗いてゐる眼だ。北條は気難しく、又人なつこい。彼の眼の中に僕は何よりも彼の心の苦痛そのものを何時も感じて来た。」

光岡が示した北條の眼は、力づく社会に立ち向かう人のものと言うより、悩み傷つきながら手を取り合える誰かを求める気弱な人のものということなのだろう。「北條民雄といへば、癩の中に毅然と生き抜いて書いてゐる作家と多くの人は想像してゐる。嘘つばちだ。彼ほど絶え間なくなやみ、憂鬱にひしげ、暗澹とした精神の暗渠ばかりをくぐつて来た者があらうか。」と作家北條を描いてみせる光岡である。「癩といふものを社会と文化のど真ん中



に据えて、その存在価値を追求せずにはいられなかった」と北條の文学を評してみせる光岡である。その眼には、しかし北條が癪に向けられる社会の、人々の視線に怒り反発しそれを告発しようとする姿は映っていない。北條の癪を見る意識は、自身の病氣と自身の生、死を見る時でなければ、社会の視線とそう大きく変わってはいなかったのかも知れない。

## 5

北條民雄の作品の中には、既に述べて来たように、癪という病が置かれた状況、社会の意識、差別と隔離といったことどもに関して殊更な言及はない。自ら医師の診断を受け、自らの意思で癪病患者の収容所に入所していったのであってみれば、社会から理不尽な扱いを受けることもなく、逆に自らそういう扱いを受ける前に社会に背を向けるといった思いもあったのかも知れない。癪病に罹患したことを受け入れ、その上で癪という病が必然的に患者にもたらす未来の可能性に向き合い、対処を考えねばならなくなった。北條自身にも発病当時、癪という病氣がその悪化に従ってどういう変容を辿るのか十分な知識はなかったのかもしれない。

それはおそらく、川端を初めとする多くの読者も同様であつたろう。多くを知らなければ、自分たちが偏見を持つ側に荷担しているとは考えもしない。不治の、業病とされる、社会から隔離されて―それが自由を奪われ閉じ込められることだと考えもせず―治療されねばならない、可哀想で悲劇的な病氣なのだ、といった、疑問を持たない視線。その視線が共有される中で、北條民雄は読まれ、受け入れられていったのではなかったろうか。

癪を病み、死に向かいその身が崩れ落ちていくのに向き合わねばならない患者達の中にこそある「いのち」その



ものを見出した、希有な精神力。読者が北條に与えたその評価は、確かに小林秀雄が「作家の顔」で言うように、作者を癩病患者だと書いたことを「失敬だなどと憤慨する結構な社会に生きてゐる」からこそ、生まれたものだったのである。

## 1 附

癩病は、その名が過去の偏見や差別と分かち難く結びついているため、現在では病原菌発見者の名を取ってハンセン病と呼ばれる。しかし、本稿では、北條民雄の置かれた環境とそこから生み出された文学を考えるためにあえて「癩」という言葉を使っている。ただ言葉を換えることが何かを変えることであるかのように錯覚してしまうことは、問題の本質を見誤らせることでしかない。

## 2

本稿で殊更に触れることはなかったが、平成26年8月、徳島県阿南市の阿南文化協会が「阿南市の先覚者たち第1集」を発行した。その中で北條民雄が取り上げられており、その出生地や本名、父の名が明かされた。

七條林三郎の次男、晃司。京城生まれ。既に北條の出自については、五十嵐康夫の詳細な研究によって明らかにされていることは知られていた。病気をめぐる社会的環境を慮って秘匿していた、ということである。であれば、改めて五十嵐の研究成果は提示されてしかるべきだとも思える。郷里が徳島であることは全集に収められた書簡にも記されていた。癩予防法が廃止されても尚、偏見は十分に払拭されてはいない。だが、おそらくは親族を含む北條の郷里の人々によってその人となり、成長の道筋が明らかになっていくことは、癩Ⅱハンセン病の偏見をなくしていくためにも有意義なことだろう。作家北條民雄がどういう生まれのどういう成長を

した人間かということが彼の残した作品の読解に大きな影響を与えることはないだろうが、どのような過去があったことによって、七條晃司という青年が癩病院に隔離入院した後作家北條民雄になることが出来たのか、を考える大きな材料は与えられるだろう。文学上の北條民雄研究の進展が期待できる、ということである。むろん、その為に多くの情報が開示されていかねばならないが。平成26年はその為の、最大の難関が越えられた年となったのである。